会　　議　　名	令和５年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　　務　　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	令和５年９月２２日（金）１８時３０分～２０時００分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 坂井文枝委員 加藤治紀委員 中川法子委員		
欠　席　委　員			
事　務　局　員	コミュニティ文化課文化推進係　　津端　佐原 同　　はけの森美術館学芸員　中村、河上、西尾 同　　はけの森美術館学芸顧問　河合		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	（１）事業報告等 （２）意見交換 （３）その他、次回日程調整等		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料			

【鉄矢会長】　　皆さん、こんばんは。本日は雨の中お集まりいただき、本当にありがとうございます。ただいまより、令和５年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

さて、次第１の展覧会の観覧につきましては、既に皆様、御覧いただいたと思いますので、次の議題に進ませていただきます。

まず、配付資料の確認をします。議事録があって、それから、資料１が、開催中の展覧会・教育普及事業等（報告）になります。資料２が、横長の表になっている１枚です。資料３が、提言策定に係るスケジュールというクリップ留めのもので、よろしいでしょうか。

【事務局】　大丈夫です。

あと、学芸顧問の河合先生なんですけれども、前に別の会議が入っていて、今、駆けつけていただいております。

【鉄矢会長】　　分かりました。ありがとうございます。

今日は、事業報告をやって、その後に運営協議会の提言について、それから、その他という流れになります。

では、事業実施報告等ということで、よろしくお願いします。

【河上学芸員】　　学芸員の河上です。まずは、運営協議会資料１から御覧いただければと思います。１番の開催中の展覧会・教育普及事業等の報告、１番の企画展について、御報告いたします。

こちらの展覧会は、前回の運営協議会が春だったと思うんですけれども、少し間が空きまして、今回お集まりいただいているんですが、その間、８月下旬に展覧会、今、御覧いただきました「笹川治子＜中村研一作品とともに＞　届けられた色」の設営が完了し、９月２日、土曜日から１１月５日までの期間をもちまして開催中です。

開館時間につきましては、こちらの記載にありますとおり、午前１０時から午後５時で、休館日は今回、週６日開館なので、休館日が月曜日のみで、会期中に祝日が２日ほど入りまして、９月１８日と１０月９日の月曜は祝日開館で、翌火曜日が休館となっています。

観覧料につきましては、これまでの企画展と同様に、一般５００円、ただし今回、会期中、同じチケットを持って再入場可能という設定をしております。さらに今回は、高校生以下と障害者手帳をお持ちの方は無料ということで、小、中、高と未就学児のお子様は皆さん無料で入れるような観覧料の設定にしております。

助成は、前回と同じ御報告内容なんですけれども、３つの助成団体から助成金を受けて

おります。花王芸術・科学財団、朝日新聞文化財団、小笠原記念財団の３つから助成を受けて、展示及び、小笠原記念財団からは印刷物の翻訳費の助成を受けております。

本日２２日までの入館数が、こちらにありますとおり１９９名ということで、今、１８日間開館で１日平均が１１名で、実は先ほど、同じ時期、去年の夏の企画展の入館者数と比べてみたところ、あまり変わらないということなんですけれども、今回、この後に出てくるんですが、教育普及事業に関連して、市内の公立小学校の鑑賞教室が予定されていて、実は１校、予定されていた第三小学校が先日の台風の日に当たってしまいまして、こちらがキャンセルになったということで、もしキャンセルになっていなかったら、恐らくこの倍までは行かない、１．５倍ぐらいの入館者数になっていたのではというところなんですが、一般の有料のお客様及び、鑑賞教室ではない一般の無料のお客様の平均でカウントしてみますと、例年とほぼ変わらないような状況です。

この展覧会に関連した企画イベントにつきましては、「関連企画※既に実施したもの」というところを見ていただきますと、１番の佐藤道信先生（東京藝術大学教授）による特別講演会が９月９日、これは関連イベントの第１弾として開催されまして、こちらについても実施が終わっております。参加者数は１０名だったんですけれども、アンケート等にお答えいただきまして、大変満足したというような御回答をいただき、約２時間の講演会を実施いたしました。

２番の担当学芸員＆笹川治子によるギャラリートーク、これは、実は２回行われるんですけれども、１回目が先週の土曜日に行われて終了しておりまして、こちらについても、笹川治子さんが当館に来館いただきまして、私、河上と笹川さんの２人で展示を案内しながら、約４０分を予定していたんですけれども、話が終わらず、１時間ほどトークをさせていただきまして、参加者の人数が１２人というところで、実施が完了しております。

この後、これから実施するものとして、３番、参加型ワークショップ、明日の９月２３日に、これは創作ワークショップなんですが、大人向けの高校生以上を対象としたワークショップで、これも笹川さんが来館して開催するものになっていて、今、ここのお部屋に来る途中のラウンジの「思い出のかけらを集めて」という企画に関連した創作ワークショップを明日行う予定です。

４番、笹川治子による子ども向けお絵かきワークショップ、これは来月１４日に行われる予定なんですけれども、こちらは笹川さんにまた講師として来館いただいて、どなたでも参加可能という形なんですけれども、お子さんを中心とした絵を描くワークショップで、

内容としては、キャンバスに絵を描くというような、かつ、絵の具を使って描くという内容のワークショップになっております。

５番の担当学芸員と笹川さんによるギャラリートークは、先ほど申し上げたギャラリートークの第２回目なので、時間としては、また４０分を予定していて、もしかしたら少し延びてしまうかなというようなところなんですけれども、こちらを最後のイベントとして設定しております。

現在開催中の企画展についての御報告については、以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

引き続いて、続けていいんですね。

【西尾学芸員】　　学芸員の西尾です。続きまして、２番の教育普及事業の職場体験学習のところから御説明いたします。

今年の、誤植ですね。７月５日から７日にかけて３日間、美術館のすぐ近くの小金井市立第二中学校の、当館への職場体験を希望する生徒３名を対象に、こちらに記載しているような職場体験の実施を行いました。主に、作品を鑑賞し、言葉でそれを見る観客の方に説明するディスクリプションと呼ばれる作業の体験ですとか、また、それに基づいて作品解説を書くという体験をしていただきました。

実際に当館で所蔵している作品を見て、書いていただくことも検討したんですけれども、やはり作品の安全上の問題から、当館で所蔵している複製画を使った形での作品解説を作っていただくこととしました。なので、当館で今後、その解説を使うことはできないんですけれども、一つの体験として行っていただきました。

また、ちょうどこの７月の時期が、笹川治子展の広報物を発送するときでしたので、発送作業を私たちも行っていたので、それを手伝っていただいて、一緒に発送作業を行いました。

また、当館では７月下旬に、笹川治子展に係る市民の皆様へのアンケートというのを実施していたんですけれども、そのアンケートを美術館に来て書いていただくために、美術館の開放日を１日設定しておりまして、これを告知するためのポスターを、この３名が美術部の生徒さんで、美術館にとても関心を持っていたということもありましたので、手を動かして書いていただいて、それを美術館の前に掲示して、告知のためのポスターを制作していただきました。

続きまして、鑑賞教室については、先ほど御連絡があったとおりなんですけれども、台

風のため、９月８日の鑑賞教室は中止となりまして、再度スケジューリングすることが厳しいということから、代替日程を設定できませんでした。ただし、こちらの展覧会が、小学生は無料の企画であることを先方にお伝えしたところ、生徒が各自、自由に観覧に来ると、そのようなお話を受けております。

次に、その他で。

【中村学芸員】　　では、その他のところに関しましては、学芸員の中村より報告させていただきます。

その他のところで１件、富永親徳氏作品の修復に伴う洗浄作業（クリーニング）というものがございますけれども、厳密に言いますと、下の備考に書いてありますように、寄贈に向けて、まだ寄贈されていない作品に関する報告です。ただ、厳密な意味で言いますと、ですので、現時点では当館の所蔵作品ではなくて、また、実はクリーニング作業に関しましても、当館の予算内で行われていることではないので、こちらの運営協議会で報告する内容としましては、少し性格が違うというところもあるんですけれども、前例のないことですので、報告させていただきます。

こちらの富永親徳氏ですが、ここにありますように、市内にアトリエを構えておりました中村研一と同世代の洋画家です。生まれとしまして、中村研一とほぼ同い年です。こちらの方の作品を、ここにありますように９７点、現在、寄贈に向けて調整を進めているところなんですけれども、寄贈の前に、現在の所蔵者のほうで、寄贈して展示ができるような形にクリーニングの作業を、こちらは費用負担してくださって行うということで、既に作品は当館のほうで預かっておりますので、こちらの２階の多目的講義室を使いまして、６日間、修復、クリーニング作業を行いました。

クリーニングのほうは、ＪＣＰという修復専門のＮＰＯのほうに請け負っていただきまして、現在の所蔵者と修復工房との間を美術館が仲立をする形で、ここで作業をしていただきました。１９日までの全６日間で作業を終了いたしまして、現時点できれいになった作品を９７点、当館のほうで引き続きお預かりしている状態になっています。もともと、かなり経年で汚れなどが蓄積していたんですけれども、そういったところをケアしていただきまして、それから、剥落に対する対応なんかもしていただいて、一定、展示を考えていけるような状態になったと見ております。

今後、そうした形で、収集評価委員会に改めてかけまして、作品として受入れを進めていくということになろうかと思いますので、こちらの寄贈の受入れに関しましては、以降

の運営協議会で報告できるかと思いますが、現段階で、まず、クリーニングが行われたということを報告させていただきます。

その他に関しましては、以上となります。

【鉄矢会長】　　では続いて、今後の展覧会・教育普及事業等です。

【西尾学芸員】　　学芸員の西尾です。今後の展覧会・教育普及事業について、説明させていただきます。

まず、この次の展覧会は、令和４・５年度市町村立美術館活性化事業の一環としまして、福岡アジア美術館の所蔵作品をお借りして開催する「うるおうアジア　―近代アジアの芸術、その多様性―」となります。

こちらは、去年の運営協議会から度々告知させていただいていた展覧会が、ついに今年１０月に、巡回して当館に回ってくることとなります。現在は、ちょうど笹川治子展とほぼ同時期に、長野県上田市のほうまで無事巡回が進んでおりまして、当館でも現在、広報物等を作成しているという段階になります。以前までは、関連イベント等が決定しておりませんでしたが、広報物の作成に向けて関連企画が決定いたしましたので、今回はそちらの御紹介をさせていただきます。関連企画というところを御覧ください。

まず１つ目は、亜細亜大学、武蔵小金井駅から歩いて行かれるかと思いますが、亜細亜大学と連携をしまして、一日多文化工作ワークショップと題して、イベントを行うこととなりました。こちらは亜細亜大学の学生さんに実際に当館に来ていただいて、ワークショップを行っていただくという、午前の部、午後の部と分かれた企画となっています。

午前中は、切り絵の体験です。この切り絵が、どこの国の切り絵かということなんですけれども、今回は、「うるおうアジア ―近代アジアの芸術、その多様性―」というと、やはり日本の作品というのはお借りしておりませんで、基本的には中国、インド、バングラデシュですとか、そういった地域の作品を主にお借りしているんですけれども、そういうときに大事な視点として、日本もアジアの一つであるという視点はすごく大事かなと思っておりまして、ここで全く日本の文化について触れないというのはアンバランスなのではないかという話合いから、当初は、バリ島の切り絵を想定していたんですけれども、日本の切り絵体験にここは切り替えようという話で今、進んでおります。

午後の部としましては、実際に亜細亜大学の学生さんや先生の皆様が、既にかつて行っている工作ワークショップとして、小さいリキシャを自分の手で、モールですとか色紙を使って作るというような体験というのを今までも、かつてやられているそうなので、こち

らを当館でも行おうかという話で進みまして、ミニリキシャを作ろうというものを午後の部として用意しております。

午前中の切り絵体験なんですけれども、大人向け（高校生以上）となっているのが、カッターですとか刃物を使うことについて、少し先方が慎重になられているところもありまして、高校生以上とさせていただいていますが、午後の部については、子供も含めて体験できる学習になる予定です。

②と③についてはそれぞれ、ＥｄｕＡｒｔさん、えほんとあそぶアートのおうちさんという教育普及プログラムに多く携わっている方々と連携しまして、それぞれ異なる形で、作品を鑑賞したり、その鑑賞を基に手を動かして制作をするというようなプログラムを、子供向けで用意しました。一見、ちょっと似ているようなイベントにも見えるんですけれども、これを何であえて２つも入れたかといいますと、今までも当館で子供向けのワークショップを何日か設定することはあったんですが、結構いっぱいになってしまって、例えば、その日に行きたかったけど行けなかったという方もいたことがありましたので、複数で、しかも午前の部、午後の部と分かれていますので、そういった形で、なるべく多くの近隣のお子様とその保護者の皆様に、鑑賞と創作でプログラムを楽しんでいただけたらなというふうにも考えております。

４番目が、東京外国語大学の橋本雄一先生に来ていただきまして、「うるおうアジア」という展覧会について、特別レクチャーを行っていただくというものになります。橋本雄一先生は、実は去年から当館と関わりのある方でして、去年の志村信裕展を開催した際に、学芸員の河上のほうで、「花侵庵」という名前の由来を改めて調べた際に、その由来となる唐詩を橋本雄一先生に、御専門ということもありまして、翻訳していただいたという経緯がありまして、中国近現代文学の見地から今回の展覧会を鑑賞していただきまして、それに基づく解説といいますか、講演会を行っていただくといった流れとなっております。

また、５番としまして、当館の担当学芸員のほうで、１２月３日と１月２０日に、３０分程度のギャラリートークを行う予定でございます。

以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。最後の２）教育普及活動の鑑賞教室実施予定は、記載のとおりということでよろしいですか。

【西尾学芸員】　　失礼いたしました。記載のとおり、こちらは、現在は開催を予定しております。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。では、何か質問、御意見等ありましたら、よろしくお願いします。

【坂井委員】　　今の「届けられた色」を拝見した中で、「思い出のかけらを集めて」の笹川先生の作品と、６月から始めたという小金井市民の思い出集め、それぞれどういう関係性があるのかなというのをお聞きしたいです。

【河上学芸員】　　ちょっと説明をさせていただきますと、６月から始まり、今も継続して集めているアンケートなんですけれども、６月からアンケート募集を開催し、そこから集まったアンケート用紙が今、実際に展示室のラウンジのほうに全部、アルバムに挟まって、絵の面と裏がテキストになっているんですけど、絵の面を見せるような形でアルバムに挟まって、それで構成されていて、さらに、テキストの面を笹川さんのほうで編集して音声に全て換えて、ラジオから流れてくるような雰囲気という音の朗読の作品、全体が一つの作品というところなんですけれども、そういった形でアンケートが作品になっているといった形の展示をしていて、今、申し上げたように、まだ継続して集めているものに関しては更新して、またアルバム、冊子が増えていくというような、作品が、アルバムのページがどんどん増えていって更新されていくという内容なんですけれども、そういったつながりになっています。

【坂井委員】　　この本展のために、６月から集められたということですか。

【河上学芸員】　　そうですね。あれだけ集まったというのは、実は、鑑賞教室で笹川展を鑑賞する予定の、今、こちらに記載がある学校さんのほうに掛け合って、事前授業の代わりといいますか、そういった形でアンケートに参加いただけないかという御相談をしたところ、ぜひ、作品になる、インタビューをしたり、生徒さん自身の思い出をアンケートに書き込んだり、あとは、インタビューをして、その内容を、アンケートの内容が古い思い出を集めていくというような内容なので、生徒さんのおじいさん、おばあさんや知り合いの年上の方の、さらにその古い思い出をどんどん集めていくというようなコンセプトを、企画書を持ってお話ししに行きましたら、それに賛同してくださる学校さんが、ほとんど賛同してくださいまして、任意とあとは宿題みたいな、授業の中でやってくださるというような学校さんと分かれたんですけれども、２校は、授業の中で組み込んでやってくださって、あれだけの数が集まって、今、展示室にあるという形なのと、あとは、一般のお客様からも集まったものが一部、含まれているような状況で、それがまだアップデートされています。

【坂井委員】　　分かりました。

【原田委員】　　よろしいですか。質問です。原田です。質問２つあります。

２ページの３）その他のところで、クリーニングの経費が予算外の事業であるということですが、お金はどなたが出しているんですか。

【中村学芸員】　　これは現所蔵者が……。

【原田委員】　　今、持っている方。

【中村学芸員】　　はい。お持ちになっていらっしゃいます。

【原田委員】　　なるほど。

【中村学芸員】　　展示できる状態にして寄贈して、活用していただきたいということで、ここにかかる経費に関しては自分のほうで負うということでお申し出くださっていまして、これが、まず当館としては前例のないケースということの１点ですね。

【原田委員】　　ありがたいですね。普通、寄贈するときに、一般にそこまでお金を出す人はいるんですか。

【中村学芸員】　　いえ、基本的に当館では、これが初めてのケースです。

【原田委員】　　初めてですよね。分かりました。

それから、同じ２ページの一番下の関連企画の②で、１の対象が小学生低学年で、２が中学生となっていますが、小学生の中学年、高学年は対象外ということですか。２ページの一番下。

【河上学芸員】　　ＥｄｕＡｒｔさんで、これは、そうですね、小学生の低学年を対象にしています。後半のほうは、中学生向けを対象にしています。

【原田委員】　　午後が中学生ということで、そうすると、小学校の高学年は対象にならない。

【河上学芸員】　　そうですね。こちらに関しては、小学校の低学年と高学年を分けて、低学年のお子さんたちが楽しめる内容にフォーカスしたような内容でプログラムを組むというところなんですけれども、それに関しましては……。

【鉄矢会長】　　原田委員の意図はあれですよね、対象に穴が開いているよという意味ですね、対象の。

【原田委員】　　そう。つまり、低学年を例えば３年生で切るとすると、４年生、５年生の子で、僕も行きたいのにという子が除かれちゃうのはいいのかなと思ったんです。それに何か理由があるのか、そこを除外する理由がね。

【河上学芸員】　　そうですね。去年、高学年向けに志村展の関連イベントで１つワークショップを開催したんですけれども、そのときに、定員は集まったんですが、低学年向けの、小さい子向けのものをというようなお声がかなりあったというところが１つ。

あとは、受験というと非常に具体的なお話になるんですけれども、とても忙しいと。実はちょっと周りにアンケートといいますか、個人的に聞き込みをしたり、あとは、このプログラムを一緒にやってくださっているＥｄｕＡｒｔさんのほうとも相談をしまして、やはり４、５、６年生、特に５年生、６年生はほとんど、こういったワークショップなりというところの集まりは昨今、非常に厳しいと、忙し過ぎるというところがあるから、あとは需要の関係ですと、やはり小さい子たち向けのほうが集まるという視点もありまして。ただ一方で、今回、中学生を設定したというのは、ＥｄｕＡｒｔさんの御意向もすごい強くあったんですけれども、中学生か、小学生の低学年向けとは大分違うような、もう少し展示の企画の内容に触れて、そこから創作につながるような話をしながらとか、楽しいだけじゃない、少し難しいと言うとあれですけれども、違うものもあるといいんじゃないかということと、それにちょっと挑戦してみませんかということで、今回は低学年向けと中学生で設定いたしました。

【原田委員】　　分かりました。

【鉄矢会長】　　そのほか、ございませんか。

【山村委員】　　どうぞ。

【坂井委員】　　お先にすみません。鑑賞教室全般につながることなのかもしれないんですけれども、三小はちょっと台風で中止になったようですが、この後も小学生の皆さんが、こちらの笹川展には御覧になりに来ますよね。通常に、いわゆる絵画が展示してあるものと違って、小学生に分かってもらうのはとても難しいような感じがするんですけれども、全般にというか、今回は特別なのか分かりませんけど、来ていただいて、どんな感じでその子たちは見て回るのかなと。何か皆さんから御説明なさったり、そういうこともあるんですか。

【河上学芸員】　　そうですね。各学校の美術の御担当の先生とも相談をしながら内容は決めていくんですけれども、基本的には展示をぐるっと回って、学校のほうから、この作品の説明をしてくださいとピンポイントで依頼されることもありますが、そうじゃない場合は、こちらで決めたところの作品の解説を担当学芸員がして、また全体を見ていただいてというような形なんですが、今回、まだ開催ができていない状況なんですけれども、予

定としては、笹川展なんですけれども、鑑賞教室というところに関しては、中村研一の記念美術館であるというところは必ず押さえながら、プラスアルファで笹川展の企画展、２本立てという形で、作品の解説をしたり、御紹介したりというような内容を考えています。

【坂井委員】　　小さな質問ですけど、南極の船があったんですけど、初めて見たんですが、中村研一と南極のつながりはどんなことがあったんですか。

【河上学芸員】　　南極とのつながりは、実際には南極には行っていないんですけれども、挿絵を描いたと。２階の展示室のほうに、ケースに入ったはがきが幾つかあって、あそこにも、中村研一が描いた南極の絵を印刷された絵はがきというのがあるんですけれども、本当に仕事として南極の船を、「宗谷」を描いていたというところがあります。

【坂井委員】　　ついでの話で、私、先月末にちょっと東北に旅行に行ったんですけれども、青森県立美術館にこちらのチラシが置いてあって、何か昔の友人に会ったような、あるんだなんて思いました。結構いろいろなところに配っていらっしゃるんですか。

【河上学芸員】　　全国に行ったんですけれども……。

【坂井委員】　　そうなんですね。初めて見ました、よそで。

【河上学芸員】　　今回といいますか、企画の内容によって、今回は現代美術の作家さんなので、現代の企画を多くされている美術館さんには渡るようにというバランスで配布を……。

【坂井委員】　　そうなんですか。しっかり置いてありました。

【河上学芸員】　　よかったです。ありがとうございます。

【坂井委員】　　失礼しました。以上です。

【鉄矢会長】　　では、山村委員、お願いいたします。

【山村委員】　　感想が１つで、質問が２つ。

感想のほうは、今の笹川治子と中村研一とともに、「届けられた色」という副題ですが、前回質問して、「届けられた色」というのは分かりにくいんじゃないかと言いましたけど、見てよく分かりました。つまり、メッセージだけじゃなくて、作品に描かれているモチーフだとか、線だとか、素材だとか、色だとかというのがよくよく観察されていて、それが作品になっているというか、２階にあるのも、墨で描いたものを並べて、同じ船だけど、違う時代の南極の船と軍艦を並べたりとか、そういうふうに届けられるものというのが、つまり作品というのは、内容だけでもないし、形、色だけでもないし、いろんなものが混ざって我々に入ってくるということをよくよく、展示でも、作品でも、非常に細かいとこ

ろまでよく考えられて展示されているということで、すごく感心しました。

その上で聞くんですけど、作品の選定と展示の仕方、空け方もすごく抜群で、置き方とか、立体と、あと、中村研一が持っていたものとか、使っていたものとか、そういうバランスは両方でやったんですか。

【河上学芸員】　はい、そうですね。これは笹川さんと、やりながら決めるというような感じだったんですけれども、ただ、そのたたきみたいなものは、キュレーション、選定に関してはほぼ笹川さんが、まず最初の土台を、こういうものを見せたいというような土台を決めてくださって、その中で、私と西尾のほうで、これはこっちのほうがいいと思うとかというところでどんどんもんでいって、立体作品とのバランスなんかも最後まで決まらなくて、設営のときに決まっていくというような形で、本当にチームになって今回はやったというような展示の内容になります。

【山村委員】　久しぶりに、これほど神経の細かい展示を見ましたよ。

【河上学芸員】　ああ、本当ですか。

【山村委員】　今日、府中に行ってきたから見たんですけど、府中より全然いいですよ。

【河合学芸顧問】　だから、写真を、これから記録写真というか、カタログができるわけですけれども、そのときの、どこの角度でどれを撮っていくかというのも、カメラマンがいて、当然、笹川さんがいて、のぞいて、我々もふらふらしながら、ところで、どうしてこれを替えるのみたいなことをやりながら、本当にみんなでつくっていたというのは言えると思います。

【山村委員】　チラシもすごくよくて、デザインもすばらしいし、本当に感心しました。ということで、広報をしっかりやってほしいなと、もったいないので。特にブログとか、ＳＮＳとか、　　とか、お金はないと思うので、そういうところになるべく、自分も少し努力しますけど、会期も１１月５日までしかないですから、しっかりやって、少しでも多くの人に、展示が分かる人に、ぜひ見てもらうように工夫してください。

【河上学芸員】　ありがとうございます。今、笹川さんのほうでも、御自身のネットワークを駆使して、いろいろ告知はしてくださっているんですけど、我々も本当に、かなり今回は頑張って、チラシの配架の依頼なんかも、いつもより少し早めに早めにということで動いたんですけれども、なかなか入館者数が伸びないような状況なので、これからどんどん、ここからかなというふうに思っています。遅過ぎることはないと思うので、頑張ります。

【山村委員】　　やっぱりＳＮＳは大事なんだよね、あれは。

【河上学芸員】　　そうですね。

【山村委員】　　そっちのほうに力を入れてもらって。

それで質問なんですけど、２ページの富永親徳さんの修復を６日間で９７点と、かなりハード作業だけど、それをやってくれたのは何というところですか。

【中村学芸員】　　ＪＣＰというＮＰＯですね。

【山村委員】　　それはどこにあるんですか。

【中村学芸員】　　事務局が都内台東区の入谷のほうにありまして、基本的にはそちらのほうに工房を構えていらっしゃって、そちらでふだんは作業されているということなんですけれども、今回はそちらに運ぶんじゃなくて、こちらに出張してきていただいて、ここで一気に作業していただくという形を取りました。

【山村委員】　　ＮＰＯか何かなんですか。

【中村学芸員】　　はい、ＮＰＯです。正式な名前が文化財保存支援機構です。

【山村委員】　　そんなところがあるんだね。知らなかった。ありがとうございます。

それともう一個、質問で、ごめんなさい、さっき聞いてもらったんだ。遺族じゃないんですね。現所蔵者というのは……。

【中村学芸員】　　御遺族です。

【山村委員】　　御遺族。分かりました。いい話だと思います。ありがとうございました。

以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

鉄矢です。質問で、これは１１月５日という意味ですね、この日程。

【中村学芸員】　　そうです。ちょっと見て、字が……。

【鉄矢会長】　　何か字体が……。

【中村学芸員】　　１１の、１１月５日の意味ですね。

【鉄矢会長】　　これは何か、アイ、アイに見えて。この９と同じロゴなのかな。何か違う気がするんですけど、これ。

【河上学芸員】　　同じ、これですよね、１１と９がということですよね。

【鉄矢会長】　　だから、９と同じフォントだったら、違うフォントのような気がするんですけど、これはフォント間違いじゃない。

【西尾学芸員】　　違います。これはこういう……。

【事務局】　　こういうデザインですか。

【西尾学芸員】　　そうですね。今回、デザイナーの方が、特に、「届けられた色」という大きな文字と、あと、真ん中の「笹川治子」、「届けられた色」というところに関しては、中村研一が生きていた時代に使われていた文字を印刷博物館で……。

【鉄矢会長】　　はい、それは何も問題ないと思います。

【西尾学芸員】　　探していただいて、やはりこちらのアルファベット表記についても、同じように古いフォントを探してきて、フォントというか、文字を探してきてくださっていて、ここはフォント間違いということはないです。この書体で１１というのが、アイのような形になっているんですけれども、１１ということです。

【鉄矢会長】　　ああ、そうなんですか。はい。不思議な感じですね。多分、最終的には、フォント間違いかどうかのほうじゃなくて、それが見る方に伝わるかどうかだと思うんですよ。これは２週目の５日なのか、何の意味なのかなと一瞬思ったんですね。ローマ数字の、時計数字の２に見える気がしたので、多分、フォントが合っているからというのではなく、正しくお客さんなり、チラシを持った人に伝わるかどうかの観点のほうが私はいいと思います。

【西尾学芸員】　　はい。

【鉄矢会長】　　それから、２ページの一番下の関連企画、（１）亜細亜大学による一日多文化工作ワークショップと書いてあるんですけど、これはまだどこにも印刷は入っていないんですよね。

【西尾学芸員】　　入っていないです。

【鉄矢会長】　　これは亜細亜大学さんからすると一日なんだけど、受ける側からすると、一日じゃないんじゃないかなと思うんですよ。ワークショップが半日だし。

【西尾学芸員】　　そうですね。

【鉄矢会長】　　だから、これはどっちの立場でしゃべるタイトルなのか、亜細亜大学さんが一日やるぞと気合が入っているのはいいんですけど、受ける側は、一日と言って、一日行くと、半日ですねという感じになっちゃうので、ここをちょっとタイトル……。

【西尾学芸員】　　そうですね。ただ、これは午前の部、午後の部、両方参加することも可能なので、人によっては、そういう意味で、こちらは開催する側でつけてはいたんですけど、一日だと、早い人だと１０時から来て１５時までいるみたいなものを、表現の問題になるんですけど。

【鉄矢会長】　本当ですか、それ。だって、上は高校生以上と書いてあって、下も高校生以上だったらいいですけど。

【西尾学芸員】　下はどなたでも参加できます。

【鉄矢会長】　だから、そうすると対象が違うので、対象の枠が違うので……。

【西尾学芸員】　はい。全員が一日いられるわけではないです。

【鉄矢会長】　そう。だから、受け取り側として、そこで今、話合いの中で、意見として言ったときに、そうじゃないですと事務局が言ったら、このまま直らないんですよ。今、そこで私は、どうするんですかというので、考え直しますという話なのか、これでいくんですと言ったときに、それは観点として、ユーザーの目から見ていないんじゃないかなという指摘です。

【西尾学芸員】　はい、分かりました。

【山村委員】　多文化工作ワークショップでいいんじゃないですか、一日とは言わないで。

【鉄矢会長】　うん。一日は要らない気がする。

【西尾学芸員】　ただ、これが亜細亜大学さんとのまた調整になってしまうので、ちょっとそうするとまた……。

【鉄矢会長】　なので、学芸員さんにアイデアとして、受け手が見るタイトルにしましょうねという提案をすれば、亜細亜大学さんも、自分たちがやるぞという学生に声かけて、一日ワークショップだと言っているんだろうと思うんですけど。

【山村委員】　これは、講師は学生ですよね。

【西尾学芸員】　そうですね。

【山村委員】　大学のほうとやるんですか、こう。

【西尾学芸員】　そうですね。

【山村委員】　なるほど。

【鉄矢会長】　一日、亜細亜大学生がやってくるみたいなものだったら、まだ分かるんですけど、ここのところを上手にやらないと、本当に見えなくなるかなと思っていました。

ほかに御質問等はありますでしょうか。御意見等はありますか。大丈夫ですか。

では、次に入りまして、運営協議会の提言について。

【事務局】　提言について、事務局から御説明させていただきます。

【鉄矢会長】　お願いします。

【事務局】　　資料３ということで、皆様の机上に、前回と前々回の提言を置いておりますので、御覧になりながら聞いていただけたらと思います。

美術館の運協では、これまで４年に一回、提言をまとめ、市長に報告をしています。同じ委員で今年４年目となりますので、定例ですと、今年は提言を出す年に当たります。

提言を出す意義としては、きちんと文書として市長に伝えることができる公式なものであるというところです。出すか出さないかというところは、この委員会の御意見でどちらでも大丈夫です。

提言に係るスケジュールは、一応「出す」方向でのスケジュールになります。資料３の別紙なんですけれども、本日の委員会のほうでは、今日は策定のスケジュールについて決定をして、３回目の委員会では、通常の委員会ではなくて、提言の策定のためだけにお集まりをいただいて、課題とかについて話合いをいただけたらいいなと思っております。

その後は、第４回は通常の委員会、第５回で決定をして、提言を出すまでできたらと思います。

事務局からは以上になります。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

何か御質問、御意見等がありましたら、お願いします。

【山村委員】　　前回の提言が令和２年ということですよね。

【事務局】　　令和２年３月、そうですね。なので、年度としては元年度。

【山村委員】　　そうか、元年度か。

【事務局】　　はい。。

【山村委員】　　今年が令和５年だから、４年目ということで。

【事務局】　　そうですね。

【山村委員】　　前の提言が役に立った部分はありますか。

【鉄矢会長】　　建物、施設メンテナンスというのは。

【事務局】　　施設のメンテナンスの部分では、美術館本体とはちょっと違うかもしれないんですけれども、緑地の柵がずっと壊れていた部分を新しく直したりということもありましたし、あと、茶室の活用ということも言葉を提言に入れていただいたことで、茶道具を一式購入したり、茶室を活用した現代作家シリーズが生まれたりもしました。こういうことをしていったらいいんじゃないかというのを提言として入れていただくと、こちらも励みになります。

【山村委員】　　庭園のほうは、何か予算つきましたか。

【事務局】　　剪定とかということですよね。

【山村委員】　　そうそう。木が危ないという話だったから。

【事務局】　　高木剪定のほうは、何年か前にちょっと予算はついていて、提言でも何度も言っていただいているので、高木が危ないというところは、認識としては持っていただいているかなと思います。

【山村委員】　　人手不足のほうは。

【鉄矢会長】　　そうですね。

【事務局】　　はい。ここはなかなか、毎回入れていただいているんですけど。

【鉄矢会長】　　何となく最初のほうからずっと変わって、ちょっとずつ変わっているというところをフォローできるような一覧が一回あるといいですね。

常勤学芸員の必要性は平成２７年度も言っているし、このときも言っているし、でも、これは変わらない。でも、企画展は、こういうふうにやって少し動いているという話で、実施の企画展はできているとか、広報は相変わらずお金が足りないとか、それで加えなきゃいけないところと、それからもう一つ、実際に今、運営している中で、前回出していた博物館相当施設への登録についてというところなどを学芸員の方々はどんなふうに感じているのか。やっぱり必要なのか、それとも、まだ検討不足ぐらいなのか。今の展覧会、逆に言うと、なっていないからそういう展覧会をしているのか、それとも、相当施設になったら違う展覧会をしたいとかそういうのはありますか。

【中村学芸員】　　率直に申し上げて、この前の提言において、開館１０年を超えたので、したらどうかという言い方になっていますけれども、単純に時間が過ぎたから登録できる状態になったかというと、ここはちょっと厳しいところがあると思うんです。１０年という時間が単純にたったから、その分、順調に美術館が成長してきたかというと、これはいろいろな面から難しいところはあったと思いますし、そこで言うと、これは私個人の印象になりますけれども、登録博物館として、ここを登録するというタイミングとして、令和５年というタイミングがちょうどいいのかというと、まだちょっと早いんじゃないかなという気がしています。

これはどちらかとやっぱり美術館としての、特に展示環境とかそういうものというところで考えると、登録博物館に求められるような展示環境であるとか、設備であるとか、保全のための体制であるとかというところに関して言うと、まだこの美術館には厳しい部分

が現実的に残っていますし、それを登録博物館になって一気に解決できるかというと、恐らくそれも、いろいろな費用面から厳しいところがあるでしょうから、まずは体制として少しずつ改善していって、どちらかというと、時間がたったからというよりは、相当施設に足るような段階に達したところで登録するというほうがいいんじゃないかなという気もします。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。もし費用面を除外したらという話はどうなんでしょうか。だから、研究者としての学芸員として動くときに、この美術館という箱があったときに、どうありたいのか。もちろん、ある意味、役所の人間なので、役所の予算のことを考えると、それは無理ですと普通に出てくるんですけれども、そこのところをちょっと横に置いておいたときに、専門家としてここをどうしたいという観点が、今すぐ答えなくてもいいので、ちょっと考えておいていただいてほしいなと。

うちの大学もそうなんですけど、大学は予算がないとみんな知っちゃうと、何にも本当に大学は動かなくなっちゃってくるんです。でも、予算は予算のところがやっていて、やりたいところはやりたい研究をしていかないとうまく回らないので、それは少しお聞きしたいなと思っているので、ちょっと御意見を後々聞きたいです。

【坂井委員】　　相当施設になることで、これだけのいいことがあって、ポテンシャルが広がるとか、展示物の収集、展示の可能性が大きくなるとか何とか、そういうメリットがもうちょっと顕在化すると、お金の話ありきではないことがちょっと見えてくるような……。

【山村委員】　　あまり見えていないんですよね。

【坂井委員】　　ないんですか。

【河合学芸顧問】　　ないんです、本当に、残念ながら。学芸顧問の河合です。

私どもが本当は少し考えて言わなきゃいけないことだったんでしょうけれども、正直な話、現時点でですよ、客観的に見て、学芸員、非常勤で５年という枠とかがあったりして、それから、収蔵庫から何からの状態が決していい状態ではないです。１００％とは言わないけれども、それで活発に活動するとなると、やはりよそから借りてくるとかというコレクションを見せるのとともに、企画をするということになってくると思うんですね。やっぱり条件は厳しいと思うんです、現時点で。それで、ここまでぎりぎりやれているというのは、逆に、本当に皆さんに応援していただいて、ちょっと元気が出るかなみたいで、頑張っていたり……。

でも、はっきり言えば、頑張っても５年でおしまいよとなったときに、現時点での学芸員３人が、果たしてどこまでテンションを高めて、１０年先のことまでを考えられるか、そこがやっぱり僕は一番大きいと思うんですね。

申し訳ないんですけど、私がここに来て、いろんな人に会って、名刺を渡して、そうすると、ここのことを知っている人も結構いるんです。でも、一様に怒られたんですね。おまえ、行ったからには、５年というのを消すために行くんだろう、ちんたらちんたらするんじゃないと、今日も実は怒られてきたんですけど、偉い人に。はっきり言っちゃえば、東京都の相当上の広報の人と会ってきたんですけれども、やっぱり知っているんですよ、ここのことを。興味を持ってくれているんです。笹川さんなんかも、すごくいいセンスのことをやっていると言ってくれているんです。上のほうは分かっている。でも、ここがそれだけ、例えば東京都でもどこでもいいんですけど、援助、補助して、それだけの施設をもっと格上にしようかということまで行くかというと、どこもそんなお金はなくて、いいことをやっている、頑張ってくださいね、私は見に行きますで終わっちゃうんですよね。

愚痴でしかなくて申し訳ないんですけれども、全然、自分が歯がゆい感じなんですけれども、ただ、やっぱり、先ほどもいろいろと皆さんが言ってくださっていますが、ここがオリジナルの企画をやって、それでよそ様の専門家の人たちも見てくれるというのは、本当、学芸員、それぞれの専門を持っている人間としては、非常に励みになると。無論、小金井市立の美術館ですから、一人でも多くの市民の人に利用してもらいたいし、そこら辺で、ちょっと逃げちゃうかもしれないけれども、小学校の学校教育とばっちりタイアップしているというのは、世田谷も頑張って開館からやっていますけど、この美術館というのは、小学生とのタイアップというのは非常に効率よくやっているのは、これは一つ、よそ様にも自慢できるかなということになってきたと思います。

あと、いま一つは、やはり中村研一という名前がついているからには、どこからいろいろと問合せが来ても、それだけの資料というかな、何かを持って、打ち返せるだけのデータ的な蓄積とノウハウみたいな、それがあるといいなと。まだまだそれはちょっと足りない部分もあると思うんですね。それは、だから、予算的な部分もあると思うんです。あとは継続して、そういうものをちゃんとデータを取っていくということですね。ちょっと断片的で恐縮ですけれども。

【鉄矢会長】　　希望と未来を何とかここに、作っていきましょう。

その他、質問等はございますでしょうか。

ここの空調の冷媒は、Ｒ２２というやつなんですか。というのは、私も実は知らなかったんですけど、本当は知っていなきゃいけないんですが、ダイキン工業からＲ２２という冷媒の、１５年以上前のエアコンに搭載されているものがＲ２２という冷媒らしいんですけど、これが一切、世界的に使用禁止になって、一気に空調を替えなきゃいけなくなってくるときが来るんですね。代替の冷媒があるわけじゃないらしいんですよ。なので、古い冷房器具を使っているんだったら、早めに言っておかないと怖い。ダイキンを含めて、世界で禁止になったみたいですね。知らないうちに禁止になっていて。

【事務局】　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　そのほか、御質問と御意見はありますか。

【山村委員】　第３回委員会が令和５年１０月または１１月ということで、これからスケジューリングになると思うんですが、結構時間がない感じがするんですけど。

【事務局】　そうですね。提言のための委員会をどこかで一度と思って、全体のスケジュールを考えると、そこで一度と思ったんですけれども、この時期についてはあくまでも提案なので、皆さんに会長のほうからお諮りいただいて、時期も特にとらわれずで大丈夫であるんですけれども、いかがいたしましょうか。

（日程調整）

【鉄矢会長】　ほかになければ、以上で、はけの森美術館運営協議会を終了いたします。お疲れさまでした。

―― 了 ――